執事のいる社長室

星野妙子

生まれて初めて本物の執事を見たのは、メキシコの産業都市モンテレイの大企業グループ、ビトロの社長室だった。場所は工場敷地内に付設する事務所ビルの最上階。エレベータを降りると風景は、殺風景な工場事務所から美術館風の回廊へと一変していた。まずはその落差の大きさに驚き、続いて、回廊つきあたりの社長室の重い扉を開けてくれたのが、映画でよく見る蝶ネクタイに黒い上着姿の執事であるのを見て再度驚いた。メキシコの企業文化の一端を垣間見た気がした。今から二三年前の話である。

メキシコの大企業グループの多くはファミリー企業である。ファミリー企業ではファミリーの嗜好が企業文化に反映されやすい。その最たるものが社長室とみた。一介の研究者が社長室をのぞける機会はそれほど多くないが、当時は現政権与党のPANの台頭期で、同党を支持する財界は世論対策に積極的だった。そんな雰囲気もあってか、予想に反し聞き取り調査に応じてくれる大企業グループの社長は多かった。

ビトロは一〇〇年以上の歴史をもつモンテレイ財閥が枝分かれしてできた企業グループだが、同じモンテレイ財閥から枝分かれした企業グループにシドサがある。シドサの本社社屋はモンテレイ市郊外にある、まだ建って新しい壮大な低層近代建築だった。不在の社長に代わり重役が応対してくれたが、その重役の秘書の執務室ですら、当時市谷にあったアジア経済研究所の所長室より立派だったことには、少なからぬ衝撃を受けた。

ビトロ、シドサとは対照的に質素だったのが中堅企業グループのイムサの社長室だ。モンテレイ市内の工場敷地内に併設され、こちらは社長室も工場の風景の中に溶け込んでいた。ヒアリングに応じてくれたのは、若く長身でハンサムなファミリーの二代目社長で、落ち着いた語り口がとても魅力的な人物だった。

イムサの社長室には一〇年後に再度訪れる機会があった。当時メキシコの多くの大企業グループが累積債務問題に苦しみ、事業を縮小させていたのに対し、債務問題と無縁であったイムサは、その一〇年の間に民営化への参加、M&Aにより事業を拡大させ、大企業グループの仲間入りを果たしていた。そして本社は工場敷地内から、モンテレイ市郊外に近年建設された超高層オフィスビルの中に移転していた。社長室はその超高層オフィスビルの豪華な調度品で飾られたフロアーにあった。社長室の様変わりに驚いたが、もっと驚いたのは社長の変貌ぶりだった。登場したのは中年の恰幅のいい饒舌な脂ぎった紳士。一〇年の重みを、社長室と社長の変貌に見た思いがした。

ビトロにもさらにその数年後に訪れている。ビトロもその後、本社社屋をモンテレイ市郊外に新築した。新しい社屋は白亜の殿堂といえるようなコロニアル調の壮大な建物である。ただし訪問時に社長室は見ていない。十有余年の間にメキシコの企業も国際化し、広報窓口を整備し、研究者の依頼にも、広報担当がメールで対応するように変わっていた。アポとりは少し楽になったが、そのかわりに社長室からはぐんと遠のいた。あの白亜の殿堂の社長室に執事はいるのだろうか。本社内のもったいぶった雰囲気からみて、私はまだいると見ている。

ビトロはガラスに特化する企業グループで工場敷地内にある創業当時の建物を生かしガラス博物館を開設している。その傍らに社長室のあった事務所ビルは今も残っている。本当にあのビルに美術館風の回廊があり執事がいたのだろうか。殺風景な外観からは想像もできない話である。

（ほしの　たえこ／アジア経済研究所
地域研究センター）